

筑波大学博士（文学）学位請求論文

エグザンプラリテ
文学と範例性

——デリダの文学観と『千夜一夜』の現代性——

青柳 悦子

2007 年度

目 次

序章	1
第1節 本論文の目的と問題設定	1
第2節 本論文の意義——「範例性」概念の「現代性」と文学研究上の重要性	6
第3節 先行研究と本論文の位置づけ	15
第4節 本論文の構成	21
第I部 ジャック・デリダにおける「範例性 exemplarité」の概念と「文学」	
緒言——“デリダの思想”と「文学」と「範例性」	26
第1章 「範例性」概念の展開	30
はじめに——デリダにおける「範例性」の問題圏の変遷	30
第1節 「例 exemple」の問題性	34
第2節 「模範的な exemplaire」あり方の特権性と「法」	39
1) 『弔鐘』——神という最良にして唯一無二の例	40
2) 『絵画における真理』（「パレルゴン」）——判断の補助車としての「例」	46
3) 「予断——法の前に」——特殊例と一般例の決定不可能性	51
第3節 特個性と普遍性の接合に向けて	58
1) 『ユリシーズ・グラモフォン』——過剰記憶と自己例証機能	58
2) 「文学というこの奇妙な制度」——文学の「範例性」	65
第4節 「範例性 exemplarité」の構造	69
1) 『パッション』——アポリアのメカニズムとしての「範例性」	69
2) 『滞留』——生の原理としての「範例性」	75
むすび——哲学・文学・人間学としての「範例性」議論	81
第2章 「自己」の「範例性」	84
はじめに——普遍性の問い直しと「例」の思考	84
第1節 “無”の「究極例」の究極的な価値——『シニエポンジュ』	91
1) 反=詩としてのポンジュ	93
2) 「物」と特個性の力——外部へ向けて	95
3) 「スポンジタオル」と“無 rien”の例	99
4) “無”の例の偶有性と反復可能性	101
5) 「非=絶対」詩	103

第2節 「一」の反復可能性——『シボレート』	106
1) 「日付」システムにおける「一」の強化と超脱	109
2) 単数的かつ複数的な存在の可能性	112
3) 出来事の「非＝場」	114
4) 自己への非＝回帰	116
第3節 自己例証化の陥穽——『他の岬』における自己選別批判	117
1) 岬＝頂点と自己選別	119
2) 〈範例主義的な〉論理	124
3) 「特個性の詩学 Poetics of Singularity」？	126
第4節 特個的な自己をいかに語るか——『他者の一言語使用』	130
1) 自己を語る困難——自分という例を前にして	131
2) 自己の通約不可能性	135
3) デリダと西欧中心主義	140
むすび——「非＝知」と「自己」肯定の可能性	144

第3章 虚構文学の「範例性」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147

はじめに——「文学」をめぐる思考と「範例性」	147
第1節 デリダと文学——背反的二重性の場として	148
1) 「文学」をめぐる思考としての哲学——いつ文学に「なる」のか	148
2) 〈すべてを言う〉ものとしての文学と〈何も言えない〉ものとしての文学	150
第2節 「秘密の文学」——自他の反射的結合の場としての虚構文学	154
1) 文学と「言おうとしない」こと	155
2) カフカ「父への手紙」にみる自律性と他律性の凝着——鏡像反射的同一化	157
3) 赦しの懇請——自他の無限反射	164
4) 文学における自律性と他律性の結合	168
5) 不可能な系譜——文学におけるつながりなきつながり	174
第3節 「死を与える」——人間存在の「範例性」と「文学」	179
1) 近現代社会における特個性の回復——出発点として	180
2) 自己の特個性から、他者への開かれへ	188
3) 他者の特個性から、普遍性への開かれへ	191
a. 他者の特個性	
b. 特個的存在者の普遍性——あらゆる人間の特個性と人間の共通条件	
4) そのつど新たなやり直し	196
5) 〈自〉の〈他〉性と「非＝知」——非主体性の場における主体性	199
第4節 虚構＝文学の「範例性」——「タイプライターのリボン」まで	202
1) 嘘と盗みの開く文学の可能性——初期アルトー論から『滞留』へ	202
2) 偽証文学としてのルソーの「範例性」——「タイプライターのリボン」	206
3) 出来事とマシンの両立	210
4) 生の哲学としての「範例性」の思考	213
むすび——「文学」の「範例性」	219

第I部まとめ 補足と総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221

第Ⅱ部 現代的テキストとしての『千夜一夜』——文学における「範例性」のモデルとして

緒言——『千夜一夜』と文学研究	238
第4章 『千夜一夜』の生成過程と本質的可変性	244
はじめに——輪郭のない作品	244
第1節 作品の生成過程	244
1) 「起源」の不在	245
2) 反復される「完成」	251
第2節 編纂というテキスト生産活動	266
1) 二次の文学の場としての『千夜一夜』	266
2) 印刷本の登場と（不可能な）正典化	268
3) 収集編纂にみる反オリジナリティの原理	278
第3節 移動する作品	284
むすび——変貌し続ける「作品」	289
第5章 『千夜一夜』の越境性——離接的テキストとして	291
はじめに——無数の作者をもつ作品	291
第1節 テキストの離接的構造	293
1) 作品の「境界」の消失	293
2) 入れ子構造と異世界への接続	300
3) 教訓性の無効化	310
第2節 物語テキストのハイブリッド化	316
1) 転調による物語展開	317
2) 通時性のテキスト化と離接の構造	322
第3節 ジャンルの越境	325
1) 文化的位階の越境	325
2) 口誦性と書記性の越境的な混淆	328
3) 多元的喚起力——さまざまな芸術ジャンルへのアダプテーション	339
むすび——脱中心的テキストとしての『千夜一夜』	346
第6章 『千夜一夜』の汎＝反復性——テキスト構成原理としての「範例性」	348
はじめに——反復の横溢	348
第1節 反復に対するこれまでの評価——否定的評価の伝統	350
第2節 表現の反復	353
1) 夜の切れ目における反復——象徴的用法	353
2) ストック・デスクリプション——特個化と類例化	357
3) 人物の反復	359
第3節 内容における反復	366
1) 頻繁に使われるモチーフ	366

- 2) 対^{ついで}の物語 367
 - 3) パロディ的連関をなす小話群 371
 - 4) 『千夜一夜』の構成原理としての反復性 377
 - 5) 『千夜一夜』の外部との反復性 382
- むすび——『千夜一夜』における汎＝反復性と範例的存在観 385

第7章 『千夜一夜』における物語行為——語る主体の範例化・・・・・・・・・・387

- はじめに——誰がテクストを語っているのか 387
- 第1節 『千夜一夜』における一人称の語りと物語状況の不在 390
- 1) 特定不可能な物語行為 392
 - 2) 混入される回想 398
- 第2節 人称のたわむれ 404
- 1) 人称の交錯——三人称叙述と一人称叙述の同質化 404
 - 2) 一人称の話者の消滅 407
 - 3) 直接話法という越境装置 411
- 第3節 多重の声 414
- 1) 夜の切れ目における声の多重化 414
 - 2) 語り手の逆行修正 419
 - 3) 多重性のめまい——語りの急落下現象 424
- むすび——「物語」を物語る 428

第8章 『千夜一夜』における範例的主体像——「非＝知」と受動性・・・・・・・・・・433

- はじめに 433
- 第1節 海のシンドバードにみる『千夜一夜』の主人公像 433
- 1) 人食い巨人の共通モチーフ 433
 - 2) 知のヒーローとしてのオデュッセウス 435
 - a. 知性の勝利
 - b. 卓越した知的覇者としてのヒーロー
 - 3) 痴愚の代表シンドバード 441
 - a. 第3航海の梗概
 - b. 『千夜一夜』における主人公の無能化
 - c. 「非＝知」の場としての「シンドバードの物語」
- 第2節 『千夜一夜』における無能力者の系譜——その歴史的变化 450
- 1) 古層の物語——寝取られ亭主たちの無力 450
 - a. シャハリアル大王
 - b. 石に変えられた王子
 - c. 三番目の長老
 - 2) 増殖する無能な主人公たち 454
 - a. 「ペルシアもの」の取り柄のない男たち
 - b. 「バグダードもの」の情けない主人公たち
 - c. 「エジプトもの」での愚者の称揚と罪悪の黙認
 - 3) 女性と知——無能主人公の脇役として 465

4) さまざまな民衆文学にみる主人公たち	468
第3節 非実体論的存在観——『千夜一夜』とイスラームの認識論	470
1) 『千夜一夜』とイスラーム	471
2) イスラームにおける非連続的世界観	473
a. 世界の絶えざる創造	
b. アシュアリーの原子論——瞬間ごとの世界創造	
3) 因果論の否定——ガザーリー	481
4) スーフィーズムにおける存在顕現の哲学	485
5) 非実体論から肯定の思想へ	489
a. アラビア語にみるアプリオリな実体の否定	
b. 人間の悪と「赦す神」	
c. 人間の自己肯定	
むすび——関係論的な虚構主体の創出	496
第Ⅱ部まとめ	498
結章 デリダと『千夜一夜』	503
卷末資料(『千夜一夜』関連)	
1 収録話タイトル一覧(平凡社東洋文庫目次による)	509
2 『千夜一夜』生成過程略年表	515
3 『千夜一夜』の主要な写本・印刷本・訳本	516
4 マルドリュスの省略した物語	519
5 カルカッタ第二版における物語の切れ目一覧	521
文献一覧	537
図版出典	558

凡例

- 1) 第 I 部においては(序章の注 1 でも断るように)、ジャック・デリダの著作については脚注における著作者名の指示を基本的に省略する。混同の恐れのある場合や、他の執筆者との共著の場合はこのかぎりではない。
- 2) デリダからの引用については、できるかぎりフランス語の原文を脚注で提示する。これは、特異な凝縮力をもつ多義的なデリダのテキストの意味を、日本語訳だけで表現することが不可能なためである。本論文で掲げる日本語訳は、既訳がある場合にはそれを参考とはしているが、すべて著者によるものである。
- 3) 文献情報の提示にあたっては、基本的に書名および論文名を繰り返す方式をとった。章ごとに既出の文献については、適宜省略的な記述を用いた。
- 4) 文献情報のなかでは基本的に出版地名を省略する。ただし著者が必要と判断した場合はこのかぎりではない。
- 5) 『千夜一夜』におけるアラビア語の定冠詞ال (al-)の読みについては、平凡社東洋文庫版『アラビアン・ナイト』の訳語を踏襲したため表記が不統一となったが、基本的に前嶋信次・池田修訳に従った。

序章

第1節 本論文の目的と問題設定

本論文は、文学（とりわけ虚構の物語文学）が「特個性singularité」と「一般性généralité」ないし「普遍性universalité」の接合の場であることを示し、この逆説的な接合をその本質として見定めたとき文学がどのような可能性をもつものとして立ち現われてくるのかを示そうとするものである。本論文ではこの、特個性と一般性（ないし普遍性）の逆説的な接合を、フランスの思想家ジャック・デリダに倣って「^{エグザンプリテ}範例性 exemplarité」と名づけ主題化する。したがって本論文の目的は、文学がいかなる意味で本質的に「範例性」を有するのかを明らかにし、そこから帰結する文学の特徴と意義を素描するものと言い換えることができる。この目的のために、いわば理論編として第I部ではデリダの諸著作を採りあげて「範例性」をめぐる議論を検討し、第II部ではいわば実際編（ケーススタディ）として「範例性」が端的に体现されている特異な文学素材として『千夜一夜』を検証する。

特個性と一般性との接合という矛盾したあり方が、いわば「人間的論理」としてきわめて重要であることを早くから見抜き、さまざまな著作活動を通じて執拗に考察した思想家として本論文ではジャック・デリダJacques Derrida（1930-2004）を採りあげる。デリダは個別的であることと一般的であること、ないしは特別なものであることと“ありきたり”のものであることが両立するということを「^{エグザンプリテ}範例性 exemplarité」という用語を立てることによって概念化した。そして人間の存在様態と思考活動の特徴をなすこの「範例性」というあり方がとりわけ本質的なものとして前景化される場として「文学」を捉えた。本論文の目的の一つは、蓄積の豊富なデリダ研究のなかでも、これまで本格的に論じられたことがほとんどないこの「範例性」に焦点を合わせ、この概念をめぐるデリダの議論を整理しながら、「範例性」という問題設定が現代の私たちにとっていかなる射程をもつのかを明確化することにある。

特個性と一般性（・普遍性）との接合としての「^{エグザンプリテ}範例性」という概念を精査することの意義は、単に、この問題設定を軸にデリダがこれまで読み通されたことがないということ、つまりは難解で巨大なデリダをひとつの新たな観点から読み直してみるという点のみ

に求められるのではない。本論文が、デリダにおける「範例性」をめぐる考究の詳細な検討を課題とするのは、特個性と一般性（・普遍性）との接合が「文学」の本質と関わる問題であることが 20 世紀半ば以来さまざまな研究者・文学者によって意識されながらも、十分な質と量をもってこの問題が議論されることがなかったと見受けられるからである。デリダの議論においてはまさに、「文学」の本質と接続する問題として「範例性」が考察される傾向にある。今日において「文学」の意義とはなにか——その普遍的な「答え」など存在するはずもないが——を考える一つの鍵として、「範例性」をめぐるデリダの議論はきわめて貴重であると思われる。

この作業は、とくにフランスを中心として欧米諸国で 20 世紀後半に繰り広げられた「文学理論」がもつ動向の一つを捉えることにもなる。19 世紀後半から始まる文学研究の「科学」化（ないしは「学問」化）——すなわち文学の Science の樹立——は、必然的に、研究の対象たる文学作品から一般化可能なものを抽出する使命を批評家や研究者に与えた。その一方でロマン主義以来の独自性・個別性・新奇性への確固とした価値づけが、20 世紀においても強力に機能してきた。20 世紀半ば以降のいわゆる「文学理論」のブームは、圧倒的に強固なこのロマン主義的な価値観に対して、抽象性・観念性・普遍性を価値付けようとする姿勢が興隆をみせたものと捉えることができよう。ただしそれは（たとえ先鋭なマニフェストにおいてはたしかにそう標榜されていたとしても）個別的なるものの全面的な否定ではなかったと考えられる。時代状況として十分に独自性・個別性・新奇性への価値づけが強固であった文脈のなかで、いわばカウンターバランスをとるかのようにならざるに抽象性・観念性・普遍性への志向が前面に押し出されたのではなかったか。そう考えて見れば、20 世紀後半の「文学理論」の潮流は、具体的なものと抽象的・観念的なもの、個別的なもの一般的なもの、新奇なもの普遍的なものとの両方を併行的に維持するための活動だったと言える。その意味で、本論文が捉えようとするデリダの議論は、20 世紀後半の「現代文学理論」がその本質において堅持していた視座というものを、もっとも明確に示す一例と位置づけられると思われる。

本論文第 I 部はデリダの諸著作における「範例性」の議論をたどる。その狙いとするところは上記に述べたとおりである。したがって、本論文はデリダ論としては包括性を欠いた、はなはだ不十分なものとしかかなりえないことを断っておかなくてはならない。デリダの残した膨大な著作の全てを網羅するわけではないし、また採りあげる著作についても「範例性」の議論に的を絞っているために、その著作が本来もっていると通常議論される内容とは大きくずれた形でしか検討がなされないということもしばしばであるだろう。しかしこれは、（難解なデリダの場合には顕著な）テキストの全てを「理解」しきることはできないという限界を別にしても、ある一つのテーマ設定を立てた以上は甘受しなければならない

い限界である。またデリダの文学論についての研究という観点からも、さまざまな欠落を本論文は有している。デリダが文学を扱った論考のすべてを本論文は網羅しているわけではない。初期の論考でいえば、ジャベス、後期で言えばボードレー、シェイクスピアを扱った論を本論文では検討していない。とりわけデリダによる文学テキストをめぐる考察としては重要なブランシヨ論（のちに『海域』*Parages*に収められた諸論文¹）とマラルメ論（「二重の会」*« La double séance »*、『散種』*La Dissémination*所収²）について採りあげていない点は重大な瑕疵との指摘を受けるであろう。しかしこれまで「デリダと文学」という観点からは圧倒的に多くの研究者が、ブランシヨをめぐる論考を対象とするか、『散種』のなかでもっとも重要で、デリダのテキストの難解さを象徴するともみなされる「二重の会」を論じることに汲々としてきたように見受けられる。本論文ではある意味ですでに多くの研究者からの言及が多く、またなにより「範例性」という観点からは第一義的な重要性を持たないと思われるこれらの論考を一端脇に退けてみることで、デリダの思考活動における「範例性」概念の展開を、彼独自の「文学」観の練成とからみあうかたちで提示したい。

本論文は第Ⅱ部において『千夜一夜』を扱う。第Ⅰ部と第Ⅱ部は相補的な関係にある。デリダはさまざまな著作において「範例性」の概念を議論し、またとりわけ個々の文学作品の特質やあるいは文学一般の本質と「範例性」を結びつけて考察を展開している。しかし「範例性」と文学との結びつきそのものを主眼としてまとめた論考をおこなったことはない。デリダの著作全体からは「範例性」と「文学」の本源的な結びつきをひとつの揺らぐことのない主張として導き出すことができるが、その議論は拡散的にしかおこなわれていない。また個々の議論においても、「範例性」と「文学」との問題は（あるいは「範例性」の問題そのものに関しても）、対象として採りあげるテキストについての総合的な論述展開のなかで時おり提示されるという仕方であられ、つまりは付随的な言及のかたちしかとっていない。したがってデリダの論考を追って「範例性」と「文学」の関係について整理するだけでは、この問題を考えるには不十分なものたらざるをえない。「範例性」という観点から文学作品を考えるという試みが、別個になされる必要が生じてくるゆえんである。

本論文では「範例性」と「文学」との本源的な結びつきをもっとも顕著に体現する作品として『千夜一夜』を俎上に乗せる。特定の作者をもたず、長い時間をかけてたえずそれ

¹ Cf. Jacques Derrida, « Pas » (初出 1976), « Survivre » (初出英訳版 “Living on, Border Lines” 1979、その後大幅に加筆), « Titre à préciser » (初出 1981), « La loi du genre » (初出 1981). いずれものちに以下に所収——Derrida, *Parages*, Galilée, 1986 (Nouvelle édition revue et augmentée, 2003). なお、本論文第Ⅰ部においては、以下、デリダの著作については、その著者名を省略する。

² *La Dissémination*, Seuil, 1972.

自身変貌しながら醸成され、諸文明の間を往還しながら発展し、アラブ世界を代表する文学であるとともに世界的に共有される文化素材となっている『千夜一夜』は、成立・発展の経緯、存在様態、表現上の特徴、構成、内容（人物、モチーフ、ストーリー展開）などさまざまな面において、通常の文学作品とは異なる——多くの場合、通常の規範を「外れて」いるがゆえに価値において「劣った」——作品とみなされてきたが、本論文では、こうした特質を「範例性」の観点から再検討し、積極的に^{ポジティブ}に評価するとともに、この作品を、文学一般の本来的な「範例性」を代表的に表わす作品として位置づけ直すことをめざす。

したがって本論文は『千夜一夜』をいわば世界文学とみなし、あえて言えばアラブ＝イスラーム世界内部の固有文化財産とは考えない立場をとる。たしかに、『千夜一夜』を考える場合に、それが中世アラブ世界で発展し中東地域の文化伝統および社会状況を反映して生成されてきたことは根源的な重要性をもっている。本論文でも『千夜一夜』の特質として中東的、アラブ＝イスラームの要素をこの作品の本来的「範例性」と関係づけて考察することもおこなう（とくに第 8 章）。しかし本論文の立場は、まずこの作品を、特殊的にアラブ世界の文化を示すものとしてではなく、広く「文学」一般の本質を示すものとして捉えるものである。いかなる地域のいかなる時代の作品であれ、それが普遍的な特質を担いうるものであることは一般的な真理であるが、とりわけ『千夜一夜』は、文明の境界を越え、時代と地域を越えて生成してきた作品であるだけに、ローカルな特性に限定して捉えるだけではその存在意義を十分に考察することは不可能であると思われる。本論文が『アラビアン・ナイト』という、現在世界的に流通しすでに公称ともなっている通称題名を用いず、『千夜一夜』という題名を用いるのもこの理由による。これは是が非でもアラビア語原題名に忠実なタイトルを用いるべきであるという原典主義的な配慮であるよりは、できることならば、『アラビアン・ナイト』という通称が不可避免的に表わしてしまう特定地域へのこの作品の帰属化を必要以上に助長することを回避したいという意図によるものである。むろん『アラビアン・ナイト』という通称が好まれた理由でもある多分に「オリエンタリズム」的な“アラブ世界”イメージにたいする、本論文の警戒と違和感もこの選択を支えている。

『千夜一夜』をアラブ世界の占有財産とみなすことを避けるという立場は、本研究の重大な欠点そのものとも結びついている。アラビア語テキストの詳細な読解をおこなうだけの語学力も、アラブ＝イスラーム文化についての該博な知識も持ち合わせずに『千夜一夜』をめぐる研究を試みることは、それだけで研究としての意義に対する疑問を惹起するにちがいない。しかし『千夜一夜』はアラブ文学の、あるいは中東世界文化遺産の枠を超えた重要性をすでに獲得した作品であり、今日ではとりわけ超域性を有している。したがってアラビア語を一文字も解さなかったとさえ言われるドイツのミア・ゲルハルトによる研究

³が『千夜一夜』研究史の中でもひととき重要な功績として評価され、あらゆる『千夜一夜』研究者によって依拠されているという例にみられるように、研究の手法と目的によっては、かならずしも高いアラビア語能力を必要としないことがあり得るだろう。本論文はすでに述べたようにアラブ文学研究の立場から『千夜一夜』を考究しようとするものではない。アラビア語については辞書を頼りにごく簡単な文章を解する程度の力しかなく、またアラブ＝イスラーム文化についても非＝専門家としての一般的な知識しかもたないままに『千夜一夜』についてのなにがしかの考究をおこなうことは、むしろ今日この作品が身を置いている世界文学内でのポジションからして、一概に否定されるべきものではないと考えられる。『千夜一夜』に刻み込まれたアラブ＝イスラーム的特質を見据えるまなざしをもちつつも、この作品から湧出する文学研究一般に資する触発を捉えることを本論文では最大の課題とする。その目的のためには、フランス語、英語、日本語への翻訳版の参照や、既存の諸研究の成果への依拠で足りる部分が十分にある。アラブ文学の専門家ではないからこそなしうるような『千夜一夜』論を、むしろそれが必然的に抱える大きな限界を強く意識した上で、展開することが本論文の意図するところである。

非専門的な立場からのアプローチという点は、本論文第 I 部のデリダ論についても当て嵌まる弱点であった。文学的視座からのデリダ研究は、哲学研究の領野においてデリダを捉える本格的な研究をおこなう立場からすると、すでにマージナルなものとして位置づけられるであろうし、それも「範例性」という（これまで見過ごされてきた）特定の観点からデリダの文学観に照明を当てようとする研究は、所詮はささやかなエピソード集を作り上げるにすぎない小さな観察の連続に終わるものとみなされるかもしれない。しかし、デリダのおこなった論考を十分に把握することを目指しつつも、デリダの作業を理解することを最終目標とするのではなく、文学（とりわけ虚構物語文学）の本質とその今日的な意義とを考えるに資するものをデリダから摂りだすことを目的とする本論文にとって、デリダ研究としてのある程度の非専門性は前提的要件であると言える。

以上述べたように本論文はデリダ研究としても『千夜一夜』研究としても決して完結した総合的本格研究たりえるものではないが、逆に言えば、デリダと『千夜一夜』をともにこれまでにない観点から見直し位置づけることを試みるこの研究は、必然的に冒険的なものとなる。『千夜一夜』という文学作品を通常の「作品」の枠をはるかに超えたある特殊な文学的＝人間的論理（それを本論文では「範例性」として概念化するわけであるが）が発現する特権的な装置として捉えなおし、その作業を通じてこの文学装置のきわめて刺激的な今日的価値を明らかにしようとするためには、そもそも本論文が問題とする「ある特殊

³ Mia Gerhardt, *The Art of Story-Telling: a Literary Study of the Thousand and one Nights*, E. J. Brill, 1963.

な文学的＝人間的論理」(すなわち「範例性」とはいったいどのような射程を含む概念なのかを明らかにしなくてはならない。しかしその概念自体が、流通する共有概念ないし明示された概念道具としてはいまだ存在していないために、この概念の輪郭とこの概念が接続する問題圏とを本論文みずからが画定する(少なくとも素描する)作業をおこなわなくてはならない。それが第Ⅰ部の作業となる。第Ⅱ部では第Ⅰ部で培った問題意識を基盤としながらも、第Ⅰ部の議論を直接的に作品に当て嵌めて該当する特質だけを指摘するという方法はとらず、『千夜一夜』という作品が包摂する特殊性を——「範例性」という本論文の主題を念頭に置きながらもそれに直接とらわれずに——丹念にたどることを試みる(とはいえ量的にも膨大で、時間的・文化的にも把握不可能なほどの厚みをもつこの物語集については、十分に「丹念」な研究など望むべくもなく、本論文の作業はある意味ではきわめて概略的なものと言わざるをえない)。ともかく本論文第Ⅱ部では『千夜一夜』という作品を出発点にして、かならずしも直接「範例性」の概念を援用することはせずに、「範例性」とかかわる諸特質が文学という場においてどのように現働化されてきたのかを検討する。

「範例性」を本質的に担うものとしての文学が、いかなる様相を提示し、いかなる認識を私たちに拓くのかは実はデリダの論考を通してもおお未知数であり、それゆえ、むしろ典型的に「範例性」を帯びた作品だと本論文がみなす『千夜一夜』という具体例のなかから、「文学」と「範例性」との本源的なかわりが生じさせえるものを見出していく作業が必要となるのである。

したがって、さきに冒頭で第Ⅰ部はいわば理論編、第Ⅱ部は実際編と述べたが、本論文第Ⅰ部が理論編であるとは、けっして第Ⅰ部の作業から「範例性」の「理論」が抽出できるという意味ではなく、(ジャック・デリダの)理論的著作を通じて「範例性」の概念および「文学」と「範例性」とのかかわりについて考えるという意味であり、また第Ⅱ部を「実際編」(ケーススタディ)と述べ、けっして「応用編」ないし「実践編」と呼ばなかったのは、「範例性と文学」に関して、応用し実践に移すべき原理やテーゼが不在であるからこそ『千夜一夜』という実例を通じた「範例性と文学」をめぐる検討作業が必要となることを標榜するためであったことを断っておきたい。

第2節 本論文の意義——「範例性」概念の「現代性」と文学研究上の重要性

本論文の意義としては、大きく二点が挙げられると考える。

本論文が表題のなかに(『千夜一夜』の現代性)というかたちで「現代性」という言葉を含んでいるのは、本論文が用いる意味での「範例性」という概念ないし問題設定そのものが、まさに現代社会の(言い換えれば社会の「現代的」状況と呼ばれるものの)本

質的な特性と深くかかわっている、と本論文では考えているためである。したがって本論文の意義としては、第一に、「範例性」という概念を明らかにし、その射程を見極めたうえで、デリダがこの概念を用いながら展開する現代社会における人間の新たな肯定の仕方を明らかにすることが挙げられるだろう。またその延長として、この現代的な意義をもつ人間肯定の姿勢が、「範例性」をさまざまなレベルで帯びている『千夜一夜』という作品によって私たちに提示されていることを示すことも、本論文の「現代的」な意義と言えよう。

では、「範例性」は、いかなる意味で「現代的」な問題なのか。この点について少し説明を加えておこう。本論文では、特個性singularitéと一般性généralité（ないし普遍性universalité）との接合を「^{エグザンplarite}範例性 exemplarité」という術語で捉えるのであるが、ひとりひとりの人間の個別性（＝特個性）の尊重と社会的^{ソシヤル}一般性との両立は、まさに「現代的」課題にほかならない。大衆社会^{マサカ}のなかで個人が没個性化と匿名化に傷つく一方で、ますますグローバルな普遍性へのインテグレーションを求められるのが「現代」の特徴である。言い直せば、突出した個性と奇怪なまでのヒーロー（英雄）性が強く願望され、それでいて他者との差異を抹消した平均化や表層的な融和が希求されるのが「現代」の特徴なのである。そして、この亀裂をどのように生きるのかという問題こそが、ますます「今日的な」課題として、地球上の多くの人にのしかかっている。したがってこの引き裂かれた二極をそのまま引き受ける（本論文の捉える）「範例性」というあり方は、きわめて現代的・今日的な問題としてあるのであり、しかもその二極間での引き裂かれ状態を破局とも袋小路ともみなさずに、人間の貴重な本質として受け止め、そこにこそ（逆説的に）ひとりひとりの人間の尊厳や積極的な力の根源を見出す点で、「範例性」をめぐるデリダの議論と『千夜一夜』の示す存在および人間のあり方は、この現代的な困難な課題に対する（ごく簡単に言えば）希望にみちた答えを提示するものであると意義づけられる。

こうした積極的な意義は、「範例性」の問題を考えた、ほかの現代思想家と比較してみればより明らかになる。本論文が「範例性」と呼ぶ問題を考究したのはデリダばかりではない。たとえば現代社会をめぐる思索を精力的に展開したジャン・ボードリヤール（1929-2007）も、「範例性」という語は用いないものの、同じ問題をまさに現代社会の課題として考え抜いた思想家だといってよいかもしれない。たとえば彼の主著とみなされる『消費社会の神話と構造』⁴は、現代を大量消費時代という側面から捉え、この消費社会（それは消費こそが美德である社会でもある）においては、もはや交換価値は死滅している、との論を展開する。個々人にとって商品はもはや使用価値によって測られるのではなく、「記号」として立ち現れる。とりわけ自分をほかの人と差別化する「個別化

⁴ Jean Baudrillard, *La Société de Consommation*, 1970（邦訳、ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司・塚原史訳、紀伊国屋書店、1979年）。

personnalisation」のための記号＝道具として、立ち現れる。しかしこの現代の巨大消費社会システムにおいては、実は人々のあいだの「現実的差異」が消去されてしまっている。産業の独占的集中が起こり、さらに情報と流通の飛躍的拡大によって、人が手にする商品も自己のイメージも、規格化された大量生産のなかで均質化されているからである。こうして個々の人間は個性を失い匿名化していき、さらには私たちの生身の^{からだ}身体までもが^{オブ}物体＝^ジ客体と化す⁵のだが、すでに述べたように過剰に激化した情報社会でもあるこの大衆消費システムにおいては、たえず人間の^かけが^えのない^い個性が謳われ「人間性の追求＝個性化personnalisation」が喧伝される。すなわち現代社会は、個性をめぐる奇妙な戦略が交錯する場にほかならない。広告は「あなた」が「あなただけのもの」を手に入れることをそそり立てるが、それはすでに規格化され無限にコピーされた個性を私だけの個性として幻想させる、欺瞞に満ちた情報システムなのだ。人間がみずからの特個性と一般性の両極のなかに置かれているという理解において、ボードリヤールは、本論文で言うところの「範例性」という考え方に立脚していると言うことができる。

ただ、マルクス主義社会学者であるボードリヤールは、「もの」の交換価値・使用価値が消滅したこの現代社会のあり方を欺瞞と捉え、その病弊を厳しく分析するとともに、そこからの（やや回顧的な）脱出を素描する方向をとる。たとえば『象徴交換と死』⁶においては、死を生活から隔離してしまった現代社会のあり方を打ち壊すことで、巨大システム化した「消費社会」の転覆をねらう。すなわち隔離されコード化されたためにもはや交換可能な記号となってしまった死にそれ自身の重みを回復させて生と死の不可欠な対話をとりもどすために、「死の象徴交換」ないし「死の贈与」を導入するべきだとするのである。さらには最晩年の著作の一つ『les objets singuliers—建築と哲学』⁷（建築家ジャン・ヌーヴェルとの対話）では、複製^{コピー}あるいはクローンではない「特個的なオブジェクトobjet singulier」の回復が建築という素材をめぐりながら主張されている。まさに邦訳でもそのまま活かされているとおり、タイトルには« objet singulier »が掲げられ、現代社会においてほとんど不可能となった「特個的なオブジェクト」へのあまりにもストレートな郷愁

⁵ たとえば、マニュアル化された言葉づかいやふるまいがいつのまにか「自然」なものとして定着していたり、メディアで流されるアイドルのしぐさが無意識のうちに人々によって真似られたり、生活のあり方そのものが広告などで流通するイメージを追いかけているといった現象を考えてみるとよい。

⁶ Baudrillard, *L'Échange symbolique et la mort*, Gallimard, 1976（邦訳、『象徴交換と死』今村仁司・塚原史訳、筑摩書房、1982年；ちくま学芸文庫、1992年）。

⁷ Jean Nouvel & Jean Baudrillard, *Les objets singuliers : architecture & philosophie*, Calmann-Lévy, 2000（邦訳、ジャン・ヌーヴェル&ジャン・ボードリヤール『les objets singuliers—建築と哲学』塚原史訳、鹿島出版会、2005年）。

が吐露されている⁸。このようにボードリヤールは、「範例性」という概念で表わすことのできる人間およびあらゆる存在の特個性と一般性との二極併合状態を、まなざすと同時にたちまち退け、純粋化された特個性へと立ち戻ることを夢見る。しかし、現代社会が本質的に「範例性」を担う社会であるならば、そこからの脱出はありえないのであり、このボードリヤールの姿勢（および一般に特個性*singularité*への回帰の主張）は私たちにとって有効な答えとはならない。

存在の特個性と一般性との二極併合状態を肯定しながら人間の活力と存在意義を、そしてあらゆる事物や事象の存在価値を、認める方途こそが求められていることは、哲学者・倫理学者である鷺田清一の最近の主張にもはっきりと表わされている。鷺田はたとえば『教養としての「死」を考える』などの著作において、精神科医の中井久夫の次のことばをたびたび引用する——「成熟とは、「自分がおおぜいのなかの1人（ワン・オヴ・ゼム）であり、同時にかけがえのない唯一の自己（ユニーク・アイ）である」という矛盾の上に、それ以上詮索せずに乗っかっておれることである」⁹。現代社会において（そしておそらくは現代ほどこの問題が喫緊のものとなっただけではないかもしれないが、あらゆる時代のあらゆる社会において）、「ユニーク・アイ」という自己の特個性の認識と、自分が「ワン・オヴ・ゼム」であるという一般性の認識とは、どちらも棄却すべきものではなく、そのどちらか一方のみに没入することは何の解決ももたらさない。むしろこの二つのあり方の一方への沈潜は人間にとって危険であり、ここで言われているように、人間の真の成熟は、この二つのあり方をともに引き受け、この矛盾を、矛盾ということばが引き寄せるような苦悩や不安の感覚さえももつことなく自己の基礎とし、そのうえにみずからを打ち立てる——あるいはただ、安心してどっかりと乗っかっている——ことができることなのである。

「範例性」をめぐるデリダの長い時間にわたって展開された思考は、しだいに人間学としての様相を帯びてきて、私たちの誰でもが実は、この「ワン・オヴ・ゼム」と「ユニーク・アイ」の矛盾の上にいつのまにかどっかりと乗っかっていることを示そうとするところへと向かう（この姿勢は第3章第3節でとりあげる『死を与える』において顕著である）。そして本論文のみるところ、人間がこの状態を生きているということをほとんど楽天的なニュアンスで提示しつづける文学として、『千夜一夜』がある。本論文の第8章『千夜一夜』における範例的主体像——「非＝知」と受動性」は、人間が、むしろあからさまな知

⁸ Cf. 北山晴一「このひと・この3冊 ボードリヤール」、毎日新聞 2007年4月29日（日）朝刊 11面。

⁹ 中井久夫・山口直彦『看護のための精神医学』第2版、医学書院、2004年（初版2001年）、pp.188-189。鷺田清一『教養としての「死」を考える』、洋泉社、p.139、および「毎日新聞」の特集記事「あなたは今、孤独ですか」（鷺田清一への取材をもとにした記事）、2007年4月18日、東京夕刊、に多少改変して引用。

を放棄し、受動性をみずからの積極性としてもつことによって、「ワン・オヴ・ゼム」と「ユニーク・アイ」という二つの背反する存在様態を、いつのまにかともどもに実現してしまうことを、『千夜一夜』の主人公たちを通して照らし出す。すなわち本論文の観点からすると、『千夜一夜』は現代においてもっとも必要とされている人間像を提示するきわめてアクチュアルなテキストであり、現代において求められる人間学の書、存在論の書、哲学的倫理の書ともみなしうるのである。

本論文の第二の意義として、「文学」の本質的諸特性と呼べるものを「範例性」の観点から照らし出すことを挙げたい。「文学」という制度ないし装置はどのような特殊な性質をもち可能性をもっているのか。とりわけ「文学」は今日においてどのような重要性を担っているのか。こうした問いに対する答えは種々さまざまに多岐にわたるであろうが、本論文ではその一端を、文学の本質的な「範例性」という側面から明らかにしようとする。

「文学」の一般的特質を考えた場合に、その特徴の一つが、日常生活や現実世界では普通逆説でしかありえない、個と一般（ないし普遍）との重ね合わせにあるとみる見方は、実は本論文の創案でも、デリダのみの特殊な発想でも、また、『千夜一夜』という作品だけが体现するものでもない。すでに触れたとおり、大まかに言って、20世紀半ば以降のさまざまな「文学理論」の試みは、ある意味では根本のところ、文学における個別性・特個性と一般性・普遍性との接合を論じる試みだったと言えるように思われる。それまでの文学研究が、個別作品や個々の作家の特徴を論じる（ジュネットの区別に従えば）「批評 critique」の活動を中心としてきたのに対して、20世紀後半の「文学理論」は、「文学の一般的特質の研究」（ジュネットの言葉で言えば「詩学 poétique」）という方向性を明確に打ち出した。

むろん、こうした「文学」そのものの総称的な認識とその特質の解明への関心は、古くは古代ギリシア時代から（まさにアリストテレスの『詩学』という著作が代表するように）存在してきたし、とりわけフランスにおいては19世紀後半から顕著にみられ始めた「文学批評」の自律の傾向（その代表としてサント＝ブーヴが挙げられるだろう）や、文学研究と科学的論理のすり合わせの試み（テーヌやランソンの作業）、文学世界の特権化（マラルメやヴァレリー）、20世紀前半に活発化する人間的諸論理の探求としての文学研究（バシュラールやジョルジュ＝プーレやジャン＝ピエール・リシャールなど）のなかで鮮明化されてきたものである。

こうした流れの延長上にフランスを中心として欧米において60年代以降に盛んになった「構造主義」という呼称をしばしば冠されながらおこなわれた理論的な探究の試みは、文学研究においてはとりわけ個別的作品とそれが示す文学の一般的特質との双方を視野に

入れるための活動であったと言えるかもしれない。レヴィ＝ストロースによる「オイディプス神話」の分析¹⁰や、彼とヤコブソンとがおこなったボードレールの詩篇の研究¹¹、ロラン・バルトのラシーヌ論¹²や聖書テキストの分析¹³、バルザックの中篇の分析¹⁴、トドロフによる『デカメロン』に依拠した物語文法の試み¹⁵および一つのジャンルとしての「幻想文学」の研究¹⁶、あるいはプルーストの『失われた時を求めて』を主な素材としながら古今の著名作品を採りあげつつ展開されたジュネットによるナラトロジーのシステム化の試み¹⁷などは、みなそれ自体をとってみれば明らかに文学の一般論への傾斜が明白であるが、逆に、すでに対象作品の個別性が強固なかたちで社会的に共有されていたという文脈を前提にした作業であることを忘れてはならない。その後、あるいはそうした流れと前後して現れた、ポストモダンと称される一群の「理論的研究」は、ラカンによるポエムの分析¹⁸にしても、デリダのマラルメ論¹⁹にしても、ドゥルーズのカフカ論²⁰にしても、一方では強烈に対象テキストの特異な性質の抉出をおこない同時にそこから存在や思考や社会や精神についての一般論を提示する試みでもあったことに注意したい。現代思想において文学テキストが格好の素材とされたのは、文学テキストが究極の特異性の噴出と奥深い一般性の開示とが表裏一体のものとしておこなわれる場であったからにほかならないだろう。

文学というものが特個性と一般性の両極を接合する場であることを、文学に関するもつ

¹⁰ クロード・レヴィ＝ストロース『構造人類学』荒川幾男ほか訳、みすず書房、1972年（原書 Claude Lévi-Strauss, *Anthropologie structurale*, Plon, 1958）。

¹¹ Roman Jakobson & Claude Lévi-Strauss, « *Les Chats de Charles Baudelaire* », *L'Homme*, Tome II, n°1, 1962, pp.5-21（邦訳、ロマン・ヤコブソン&クロード・レヴィ＝ストロース「シャルル・ボードレールの「猫たち」」花輪光訳、花輪光編『詩の記号学のために——シャルル・ボードレールの詩篇[猫たち]を巡って』、書肆風の薔薇、1985年所収）。

¹² Roland Barthes, *Sur Racine*, Seuil, 1963（邦訳、ロラン・バルト『ラシーヌ論』渡辺守章訳、みすず書房、2006年）。

¹³ Barthes, « La lutte avec l'ange : analyse textuelle de « Genèse » » (1972) repris dans *Aventure sémiologique*, Seuil, 1985（邦訳、「天使との格闘——「創世記」三二章二三—三三節のテキスト分析」花輪光訳、『物語の構造分析』、みすず書房、1979年所収）。

¹⁴ Barthes, *S/Z*, Seuil, 1970（邦訳、『S/Z——バルザック「サラジーヌ」の構造分析』沢崎浩平訳、みすず書房、1973年）。

¹⁵ Tzvetan Todorov, *Grammaire du Decameron*, Mouton, 1969.

¹⁶ Todorov, *Introduction à la littérature fantastique*, Seuil, 1970（邦訳、ツヴェタン・トドロフ『幻想文学——構造と機能』渡辺明正・三好郁朗訳、朝日出版社、1975年；『幻想文学論序説』三好郁朗訳、創元ライブラリ、東京創元社、1999年）。

¹⁷ Gérard Genette, « Discours du récit », in *Figures III*, Seuil, 1972（邦訳、ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール——方法論の試み』花輪光・和泉涼一訳、書肆風の薔薇、1985年）。

¹⁸ Jacques Lacan, « Le séminaire sur « La Lettre volée » », in *Écrit (I)*, 1966（邦訳、ジャック・ラカン『エクリ 1』宮本忠雄ほか訳、弘文堂、1972年）。

¹⁹ さきに挙げた「二重の会」（« La double séance », in *La Dissémination*, Seuil, 1972）。

²⁰ Gilles Deleuze & Félix Guattari, *Kafka : Pour une littérature mineure*, Minuits, 1975（邦訳、ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ『カフカ：マイナー文学のために』宇波彰・岩田行一訳、法政大学出版局、1978年）。

とも啓示的な発見として強く意識し、この逆説に魅入られ、いわば尽きせぬ謎として探究しつづけた文学研究者としてジェラルム・ジュネットを挙げておきたい。ジュネットは彼の出発点となる初期の論考のなかで、ロブ・グリエの小説に「動かないめまい*vertige immobile*」を見出し、それがゆえにこの作家のテキストに高い意義を認めた²¹。「動かないめまい」とは、それぞれのものでありながらそれのものではないような、それぞれのものであってほかのものでもあるような、一つのものでありながら同時にほかの多くのものでもあるようなあり方がひきおこす“存在のゆらぎ”の感覚である。まさにこれは本論文の用語で言えば、特個性と一般性との接合としての「範例性」の問題にほかならない。ジュネットは自分の文学研究の根幹を、文学が引き起こす（あるいは文学の場において可能となる）この「動かないめまい」、別の言葉で言い換えれば「同一と他のめまい*vertige du même et de l'autre*」の追究として自覚し、みずからの論文集のタイトルを『フィギュール』*Figures*とした。彼自身、パスカルの言葉を用いて説明するように²²、「フィギュール」（型、形姿、顔つき、修辭的文彩、人間、などを意味する語）とは、存在のゆらぎそのもの（在と不在の同時的顕現）を象徴する「かたち」のことであり、言い換えればあるものが特殊なものとしてのそれ自身でありながら、必然的に他へと開かれた類型的な型でもあることを示す語、それ自身でありながらそれ自身ではないこと、「同一と他のめまい」を象徴的にあらわすキーワードであるからだ。

ジュネットは、この「同一と他のめまい」を追究して、初期の論考²³では、バロック詩を読み解き、ボルヘス文学の重要性を力説し、文学テキストを個別性の極として読むのではなく個と型との往復として修辭（レトリック）の側面から研究することを提唱し、フロベールやプルーストやスタンダールのテキストに、ある特殊なしかし一般化可能な認識ないし思考の型を見出そうとする。彼の名を一躍有名にした論文「物語のディスクール」²⁴におけるおそらくもっとも重要な発見が、プルーストのテキストにおける「括復法*itératif*」（「単起法*singulatif*」「反復法*répétitif*」と区別される）であったことは、ジュネットの研究が本論文でいう「範例性」の問題と直結していることを端的に示しているだろう。一回の記述で複数回起こったと想定される事象を表現するこの「括復法」（たとえば典型的には

²¹ Genette, « Vertige fixé », in *Figures (I)*, Seuil, 1966 (邦訳、「固定しためまい」神郡悦子訳、『フィギュール』花輪光監訳、書肆風の薔薇、1987年；『フィギュール』平岡篤頼・松崎芳隆訳、未來社、1993年)。

²² 表題ページのあとの扉ページにはこの書名を説明するかのよう、次のエピグラフが記されている——「フィギュールは不在と現前を、快と不快をはらんでいる（パスカル）」« *Figure porte absence et présence, plaisir et déplaisir. (Pascal)* »。

²³ Cf. Genette, *Figures (I)*, 1966; *Figures II*, 1969 (邦訳、『フィギュールII』花輪光監訳、書肆風の薔薇、1989年)、および *Figures III*, 1972 に所収の比較的短い4論文 (邦訳、『フィギュールIII』花輪光監訳、書肆風の薔薇、1987年所収)。

²⁴ Genette, « Discours du récit »。

「毎週土曜日に叔母がたずねてきた」といった文章、さらには「長いこと私は早くから床に就くようになっていた」という『失われた時を求めて』冒頭の一文も)は、文学が(あるいは人間の言語が)一回と複数回、その固有の一回とそれに類似した他の機会とをひと括りにして認識し提示する能力(あるいは偏向)をもっていることを示しているだろう。

ジュネットのほかの著作も同じ問題意識を発展させたものだと捉えることができる。ジャンル論である『アルシテクスト序説』²⁵はむしろ、文学をめぐる思考を作品の個別性への注視からジャンルという一般的なカテゴリーの認識へとずらすものである。これによって個別の作品は、いやおうなく、ジャンルという一般的体系との関係で位置づけられる類型的存在意義を担うことになる。『言語模倣論』²⁶は、ことばがその示す(指向する)対象にたいして内的で直接的な結びつきをもつのか、それともことばの意味作用は慣習的なものなのかをめぐる古代からの議論を追ったものだが、この作業を通じてジュネットは、人間がことばの意味作用そのものの一般的・機械的な側面を認めつつも、たえずことばの「直接的な」すなわち特殊個別的な意味作用の可能性を信じてきたこと、とりわけ文学の場がその特権的な場として位置づけられてきたことを明らかにする。また『パランプセスト』²⁷は、ほかの文学作品を下敷きにして生産される「第二次の文学」作品を丹念に集めて分類した労作である。この著作は、文学作品が個々特殊なものであるという近代的・ロマン主義的な文学観に対して、文学作品は実は他の作品の(少なくとも部分的な)反復であり純粋に単独のものとして創作されることはないという間テクスト的な文学観を提示することによって、作品創作という活動を捉える私たちの視座のなかに特個性と一般性とのバランスを回復しようとする作業だと考えることができる。「パラテクスト」論である『スイユ』²⁸は、表紙やタイトル、目次、献辞、作家による作品紹介などを採りあげて、作品の本体と呼べるものの輪郭を問い直すことによって、作品という存在の実体的なゆらぎを明らかにする。むしろ表紙やタイトルなどのパラテクスト的要素は、きわめて強く一般的ルールによって拘束されているものにほかならない。書物としての作品が、特殊的個別的な存在とイメージされつつも、いかに類型的・一般的な存在規定に本質的に依拠しているかが明らかにされる。後年の大作業である『芸術の作品』二巻²⁹は、端的に、芸術作品(む

²⁵ Genette, *Introduction à l'architexte*, Seuil, 1979 (邦訳、『アルシテクスト序説』和泉涼一訳、書肆風の薔薇、1986年)。

²⁶ Genette, *Mimologiques : Voyage en Cratylie*, Seuil, 1979 (邦訳、『言語的模倣論——ミクロジックまたはクラテュロスのもとへの旅』花輪光監訳、書肆風の薔薇、1991年)。

²⁷ Genette, *Palimpsestes : la littérature au second degré*, Seuil, 1982 (邦訳、『パランプセスト——第二次の文学』和泉涼一訳、水声社、1995年)。

²⁸ Genette, *Seuils*, Seuil, 1987 (邦訳、『スイユ——テクストから書物へ』和泉涼一訳、水声社、2001年)。

²⁹ Genette, *L'Œuvre de l'art: Immanence et transcendance*, Seuil, 1994; *La Relation esthétique: L'Œuvre de l'art 2*, Seuil, 1997.

ろん文学作品を含む)の存在規定そのものの探究である。文学作品とはもともと理念的な存在であり(普通の読み手にとっては文学作品とは内容のことであって、たとえば作家の自筆原稿といった物理的な特殊な実体によって規定されるのではない)、とりわけ複数のヴァージョンとして同時に印刷される近代の文学作品は、ある種の一般性そのものを個別の書物作品が担っていることによって機能している。版画や連続上演されるパフォーマンス芸術に至るまで、こうした個別の実体と類例的な存在様態との本源的な結びつきに関心を傾けるジュネットは、まさに「範例性」の追究者と呼ぶべきである。

現代の理論家のなかでデリダとジュネットはほとんど対照的なイメージで捉えられ、両者の近接性についてまともな議論がおこなわれたことはこれまでないが、本論文の採りあげる(とりわけ文学における)「範例性」の観点からみると、デリダとジュネットは、単に同時代人であるという理由から考えられる以上に、同一の問題意識を共有していたことがはっきりと浮かび上がってくる。

しかし本論文で「範例性」の問題圏を考究する際の対象として採りあげるのがジュネットではなくデリダであることについては、その理由を説明しておく必要があるだろう。ジュネットはたしかに「同一と他」の接合という逆説を自分の文学研究の根幹に据えたが、その接合の「めまい」について語ることはあっても、その逆説的接合の様態そのものをより深く考察したり、文学が本質として有するこの逆説の意義そのものを論じようとするとはなかった。ジュネット自身「範例的な／模範的な *exemplaire*」とか「範例性 *exemplarité*」という用語をかなり気になる語彙として使用はしているものの、それはデリダよりもさらに一層散発的であり、なんらかの概念化には至っていない。またジュネットは、新たな文学研究領域を一著作ごとにこの問題意識から案出し開拓した点で画期的であるのだが、個別性と一般性の接合に目をつけるという出発点から一旦作業を始めてしまうと、あとは精力的にその新たな研究の構築に没頭してしまうために、出発点となった問題意識が触媒としてしか働かないように見受けられるというきらいがある。すなわち、ジュネットにおいては「同一と他のめまい」の問題は通底した基盤をなしているものの、彼の各著書はこの観点の応用展開であって、基盤となる問題そのものを直接に問い詰めるためのものではないと言える。私たちとしては、文学における個と一般性の接合についての問題意識から具体的な研究手法の開拓へと進むまえに、まずこの問題そのものが本当に文学にとって根源的な問題であるのかどうか、そうであるとしたらどのような意味においてであるのかを検討する必要があると考える。本論文がデリダのテキストを対象とするのはこうした意図をもっているからである。

さらに本論文の第二の意義の補足として、『千夜一夜』を私たちの有する文学概念そのものを刷新する素材として示す点を挙げたい。

「文学」が個別性と一般性の接合の場である、すなわち「範例性」の場であるということ、をデリダの議論を通じて確認したのちに、本論文では『千夜一夜』を具体的な事例として扱うが、その意図するところはこの作業を通じて、私たちの「文学」概念そのものを拡張することである。特定の作者をもたず、たえず変化しながら成長し続け、変貌をやめることのないこの怪物的な「作品」は、文学作品というものが本来的に「個」の枠組みのなかに閉じない存在であることを具体的に例証する、本質的な重要性をもった文学作品であると本論文では考える。たとえば近代文学と古代ないし中世などのより「古い」時代の文学との二分法、「西欧」文学とそれ以外の地域の文学との二分法、高尚な純文学と民衆文学との二分法、書かれた創作文学と口誦性をもつ伝承文学との二分法など、私たちが頻繁に用いるほとんど自明視されている分類概念を超えて、『千夜一夜』は文学の本質を突出した仕方で顕現している。私たちに文学の可能性をもっとも本源的な仕方で考えさせる素材であるという意味において、『千夜一夜』はこれ以上ないほど現代的なテキストなのである。本論文は、(デリダが考究した意味での)「範例性」を担った作品である『千夜一夜』を通じて、ほかの作品を対象としたのではおこなえない仕方で、「文学」の本質と可能性を考えようとするものである。

以上本論文の意義として、人間学的(哲学的)な意義、文学研究上の意義を挙げた。

第3節 先行研究と本論文の位置づけ

デリダにおける「範例性」の概念に着目した論考はわずかにしかないが、本論文にとってはそれぞれに重要な方向性を示唆し、より大規模な研究を企てる契機となったものである。

まずイレーヌ・ハーヴェイによる二本の論文がある³⁰。1987年の「存在空間の二重化——ルソーのケース」は、デリダが『グラマトロジーについて』でルソーを論じるに当たって、自身の哲学が「例」という枠組を思考の必然的な手立てとして用いていることをメタ的に反省するとともに、この「例」が二重の存在様式を含んでいることに気づいていたことを指摘している。すなわち「例」は「単なる例mere example」であることと「特権的なケースprivileged case」であることの「二重性duplicity」によって成立しているのだ。ハーヴェイはこれを「範例性の構造 the structure of exemplarity」と明確に名づけている。ハ

³⁰ Irene E. Harvery, “Doubling the Space of Existence: Exemplarity in Derrida: the Case of Rousseau”, in John Sallis ed., *Deconstruction and Philosophy, The Texts of Jacques Derrida*, University of Chicago Press, 1987, pp.60-70.

--- “Derrida and the Issues of Exemplarity”, in David Wood ed., *Derrida: A Critical Reader*, Blackwell, 1992, pp.193-217.

ーヴェイはさらにこの「範例性の構造」が「書く」という行為の本質としてあることを議論している点でも本論文と関心を共有する。ただし、「例」となることによって、「存在」が他のなにものかの「記号」となるという方向のみが強調されている点は注意しなくてはならないであろう。

1992年に発表されたハーヴェイの二本目の論文「デリダと範例性の問題」はより充実した内容を持ち、ヘーゲルおよびカントを論じながら、デリダが「例」という問題をどのように考えたかを追っている。本論文第1章でも採りあげる、デリダのヘーゲル論『弔鐘』およびカント論である（『絵画における真理』所収の）「パレルゴン」での「例」をめぐる議論が、「法」の成立と「例」との複雑なかかわりを考えようとしたものであることを抽出するハーヴェイのこの論考も、本論文にとって貴重な基盤を形成している。デリダが「特殊」と「普遍」との関係をめぐる問題を彼の哲学の根底に据えていたことが明瞭に示され、人間の「判断」ないし「選択」が、この「特殊」と「普遍」のジレンマのなかでおこなわれるという問題設定が抽出されている。また「例」を通じていかに存在の「反復」性が本質的な問題であるかも指摘されている。「例」をめぐるデリダの問題意識を先例のない仕方ですく追ったこの論文は貴重な先行研究であるが、「普遍的 universal」なものである「法」と「特殊 particular」なものである「例」とのせめぎあいのみをデリダが考えていたとする点で、限界をもつ。ある意味では、さきの1987年の論文よりもハーヴェイは、デリダの「例」概念（「範例性」を）より単純な問題へと還元してしまっていると言える。これから本論文では、「例」と「法」との関係について、あるいは「例」がもつ二重性について、デリダがより複雑な思考を展開していたことをみていく。

ハーヴェイの二つの論のあいだに、ロドルフ・ガシェの「神、例のために〔／として〕」“God, for Example”という論考³¹が発表されている。非常に短い論ではあるが、ハーヴェイの二番目の論文の基礎となったものであり、ヘーゲル論（『弔鐘』）において、「神」という特殊な「例」をデリダが考えることで、「例」というものそのものへの思考が展開されたことを押さえている。ただしこのガシェの論は、ヘーゲルにおける「神」および（人間）存在の概念をデリダとつきあわせることにむしろ議論を集中させていく点で、本論文とは方向性を異にする。本論文では、ヘーゲルや（他の素材）に対してどれだけデリダの議論が妥当であったかを問うよりは、「例」ないし「範例性」という概念がどのようにデリダ思想のなかで展開していくのかに焦点を合わせる予定である。

「後期デリダ」の時代と言われる90年代に入ると、新たな方向からの議論が提出される。それは『他の岬』の英訳の際に、英訳者ミカエル・ナースによる序文として発表され

³¹ Rodolphe Gashé, “God, for Example”, *Phenomenology and the Numinous*, Duquesne University Press, 1988, pp.43-46.

たもの³²にも代表される、「特個性Singularity」への価値づけを軸としたデリダ解釈である。これについては『他の岬』を論じる本論文第2章第3節で詳しく論じるが、ナースの理解は、少なくとも本論文から見て、著しく偏向したものである。すなわち、デリダは『他の岬』において、一般例にすぎない「例」が「模範」として機能するという「範例性」のメカニズムを徹底的に攻撃したのだとする。そしてデリダにおいて、「範例性」あるいは「例」というあり方そのものが、いわば現代の悪として棄却されているのだという論調で議論を展開する。しかしこれは、本論文の立場からすれば、「例」をめぐるデリダの議論の一面のみを全体として拡張してしまうきわめて作為的な解釈である。「例」は（ハーヴェイが第一の論文で正しく捉えていたように）それそのものが特殊性（ないし特個性）と普遍性・一般性とを接合する逆説的な形象なのであり、ナースはデリダの議論をかなり忠実に理解しているはずであるにもかかわらず、「例」を、通常の理解どおりの“単なる例”ないし「類例中の一例」にのみ限定して考えてしまう常識的な解釈から脱することができていない。さらに、「例」が二重性を持ちえることを「範例性」と捉えることができたときには、これを欺瞞として退けるという一面的な価値判断にはまりこんでしまうのである。

ナースのこうした偏向は、彼個人の誤読というよりは、もっと深く広い背景をもっている。それは英米とくにアメリカで顕著に見られる傾向であるのだが、90年代の「後期デリダ」を

「特個性Singularity」への回帰（ないし方向転換）によって特色づけようとする強力なシナリオが存在することである。本論文にとって、ある意味では非常に参考になったティモシー・クラークの二冊のデリダ論の著作³³、およびデリダ研究を土台にして展開された現代文学論であるディレク・アトリッジの著書³⁴は、(後期の)デリダを「特個性Singularity」の賛美者ないしは少なくとも「特個性Singularity」の哲学者として位置づけるものである。こうした議論のなかで、デリダの文章を正しく参照しながら、たしかに、デリダが提示しようとしているのは単なる純粋な「特個性Singularity」ではなく他への開かれを内包するような「特個性Singularity」なのだと述べられることもあるのだが、不思議なことに、重要なはずのこの逆説的な「特個的なものの他への開かれ」のありよう（ないしは可能性）そのものを深く探求しようとはせずに、たちまち（若干の修正を施してより洗練されてい

³² Michael Naas, "Introduction: for example", in Derrida, *The Other Heading*, Indiana University Press, 1992, pp.vii-lix; repris dans Zeynep Direk & Leonard Lawlor ed., *Jacques Derrida: Critical Assessments of Leading Philosophers*, Routledge, vol. II, 2002, pp.322-341.

³³ Timothy Clark, *Derrida, Heidegger, Blanchot: Sources of Derrida's Notion and Practice of Literature*, Cambridge University Press, 1992 ; *The Poetics of Singularity: The Counter-Culturalist Turn in Heidegger, Derrida, Blanchot and the later Gadamer*, Edinburgh University Press, 2005.

³⁴ Derek Attridge, *The Singularity of Literature*, Routledge, 2004.

るものの、とにかく)「特個性Singularity」の称揚がおこなわれている、という方向で、議論が進んでしまう。こうしたきわめて偏ったデリダ理解の背景には、さらに広い文脈が透けて見える。それは、あまりにも抽象化・複雑化した哲学をより具体的で単純なものへと引き戻し、理念的一般性を追求する思弁哲学ではなく個々の事物や存在のかけがえのなさを実感できるようなヴィヴィッドな思想を求める、現代の一般的風潮である。よりわかりやすく、より具体的なものへと「哲学」のイメージを逆転させることが流行として求められるなかで、「後期デリダ」がその格好の事例としてまつりあげられているのだ。

だが本論文でみるように、デリダはまさにこうした理念性と具象性とを対立させて考える二元的な理解そのものを打破しようとしてきたのである。特個性と普遍性を接合する形象としての「範例性」はそれゆえにデリダ思想の根幹にかかわると言えるのだ。本論文の第I部は、デリダを「特個性 Singularity」の哲学者とみなす立場への対抗として書かれたと言ってもよい。「特個性 Singularity」の思想家としてデリダを捉える論者たちが扱うテキストと本論文で対象とするテキストとはほとんど重なっている。その意味で、すでに述べたように、デリダに「特個性 Singularity」を追い求める論者たちの研究は本論文にとって非常に参考にはなるのだが、そのいちいちにおいて理解が異なっている。「特個性 Singularity」の称揚者たちにとっては、デリダの論じたジョイス、ポンジュ、ツェラン、(『滞留』の)ブランショはことごとく「特個性 Singularity」の代表者とみなされ、最後期の著作の一つ「死を与える」はまさしく「特個性 Singularity」の哲学そのものであるとされる。本論文ではこれからデリダのテキストを丹念に探りながら、デリダの議論がけっしてそのような方向にはなかったことを論証する。

すでになりに影響力をもっていると思われるこうした潮流に対しては、前節で述べたように、現代において本当に問題であるのが特個性と一般性(・普遍性)の同立をいかにして心から感得するかである、という立場からする、とどうしても強く異を唱えておかなければならない。本論文はその使命感をもって書かれたとあってよい。特個性の賛美は危険であること、むしろひとを疎外状況に追い込むこと、この認識をデリダは初めから最後まで堅持しながら、微妙にバランスをとりなおして、それでも特個性を活かすあり方を見出してきたのだと本論文は主張するものである。

フランス語で書かれた管見するところ唯一のものである、デリダにおける範例性を対象化した論文(マリアン・ホブソン「デリダの範例性」)³⁵は、あくまでも、特個性と普遍性のアンヴィヴァレントな両立を「例」という形象にみる論考であり、本論文と深く共鳴しあう研究である。ホブソンはデリダの出発点(若き日のフッサール研究)から『グラマト

³⁵ Marian Hobson, « L'exemplarité de Derrida », in *Jacques Derrida [L'Herne 83]*, dirigé par Marie-Louise Mallet et Ginette Michaud, Editions de l'Herne, 2004, pp.378-384.

ロジーについて』および『エクリチュールと差異』の諸論文（とくにアルト一論）、そして『他者の一言語使用』までを、この「範例性」の問題設定が貫いていることを論じてみせた。おもに上記の著作のみを扱って手短な指摘をおこなっているこの短い論文に、ある意味では本論文の骨格が示されているかもしれない。だが、この主題から読み直すべきデリダの著作はホブソンが採りあげたもの以外にもはるかに多くあり、デリダがそうした議論において展開している思考を捉えることで、「範例性」の問題の全貌が初めて浮かびあがってくると思われる。

なお、「範例性」がデリダにとっての「文学」という概念と直結していることを明確に論じた研究はこれまでにみられない。逆に言えば、この問題設定（あるいは他の問題設定でもよいのかもしれないが）を見出すことができなかつたために、これまでデリダの文学関係の著作は、ほとんどバラバラにしか論じられないか、逆にあまりにも漠然と、デリダは文学に関心があったのだという言及に終わってきたのだと思われる。本論文はデリダにとっての「文学」という問題圏の相貌を示すまとまった研究として、意義づけることができよう。

『千夜一夜』についての研究のおおまかな流れについては、第Ⅱ部の緒言で触れることにして、ここではデリダおよび現代文学理論と『千夜一夜』を視野に入れるような先行研究を掲げることにとどめたい。

デリダなどを援用して現代テキスト論や現代文学理論的な関心から『千夜一夜』のテキストの特質とその価値を論じる研究としては、『千夜一夜』をポストモダン・テキストの観点から意義付けようとするサンドラ・ナッダッフの研究（『アラベスク——1001夜の反復性』³⁶）を挙げておくべきであろう。本論文はこの研究に大きな触発を得ている。ただしナッダッフの研究では、デリダは、テキストがテキスト自身のありように言及するという「メタテキスト」の回路を重要視した理論家として名前が出されているに過ぎず、『千夜一夜』における「反復repetition」の現象を深く分析した研究でありながら、デリダの「反復可能性itérabilité」という重要概念にも触れていない。こうしたことにも伺えるように、ナッダッフの刺激的な著作は『千夜一夜』のテキストが含む反復現象については貴重な指摘を数多くおこなっているものの、この現象が認識論的に意味するところについての考察は薄いと言わざるを得ない。むしろ『千夜一夜』に横溢する反復現象が、存在の個別性と一般性との逆説的な接合の顕在化、すなわち「範例性」の問題の顕在化であるといった観点はまったく見られない。またナッダッフが培ってきた文学理論的な問題意識はきわめて

³⁶ Sandra Naddaff, *Arabesque : Narrative Structure and the Aesthetics of Repetition in the 1001 Nights*, Northwestern University Press, 1991.

深いと感嘆させられるが、現代の文学理論家たちの作業についての具体的な知識に乏しくまたその理解は多分に表面的である。デリダについての理解もきわめて一般的なものであり、アメリカでの学生向き概説書の域を出ていない（ほとんどその見出しを利用する程度である）ように思われる。その他ジュネットやトドロフなどへも一応目配りがされているが、単なる言及のレベルにとどまり、彼らの研究の本質を捉えた上で『千夜一夜』との突合せによって新たな考察の展開を試みるといった次元にはない。同じことは、『千夜一夜』のテクスト論的研究（たとえばアラブ民族誌的研究や伝承史的研究、散文韻律論としての研究、書誌学的研究、図像学的研究、あるいはポスト・コロニアル的研究などと比較した大雑把な意味においてであるが）として重要なデビッド・ピノーの著作³⁷についても言うことができる。

現代文学理論の意識をより鮮明にとり入れた『千夜一夜』研究として重要であるのは、F・ガズルの『夜の詩学——比較文脈における『アラビアン・ナイト』』³⁸である。『千夜一夜』をそれ自身の内的論理をもった構造体とみなし、新たな社会・経済状況に次々と接するなかで変貌する作品と捉え、常識的な一貫性を超えた柔軟＝可変的な物語narrative、すなわち多様なジャンルと異質な要素を混在させるテクストとして提示したこの研究は、本論文での『千夜一夜』の捉え方を根本的に支える主張を数多く提供するものであった。この著作は、この異種混淆的で可変的であるがゆえに混沌としかみなされてこなかったこの物語集の全体に、「それ自身の批評的方法論own critical methodology」が内在している、とみなす姿勢において、本論文のモデルともなる研究あり、とりわけ理論的考察を展開したその第一部の功績を高く認めたい。ただ、この研究においては、リファテールやトドロフ、あるいは若干バルトやジュネットなどが参照されているものの、やはり理論的基盤はきわめて薄弱であり、アメリカにおける現代文学批評の教養的な範囲にその知識はとどまっているようである。それがために、『千夜一夜』を「世界文学」とのかかわりで捉えようとする意識をもちながらも、『千夜一夜』の特殊的な論理の観察から考察を物語テクスト一般ないし文学の本質的特質へと接続することに至らなかつたのだと思われる。ガズルは登場人物の「曖昧さ」、内部と外部の境界のゆらぎ、種々の反復現象、省略ないし不在の要素の効果など、いかにもデリダ的な文学観あるいはより広くポストモダンのテクスト観に合致した諸特質を『千夜一夜』に見出して考察しているが、デリダについてはたった一箇所名前が出てくるだけで、ほかにはエピグラフとしての引用があるのみであり、まったく『千

³⁷ David Pinault, *Story-Telling Techniques in the Arabian Nights*, E. J. Brill, 1992.

³⁸ Ferial J. Ghazoul, *Nocturnal Poetics, The Arabian Nights in Comparative Context*, The American University in Cairo Press, 1996.

夜一夜』分析とデリダの思考作業との突合せはなされていないと言ってよい³⁹。

最近の論文を眺めても⁴⁰、現代文学理論に貢献するものとして、つまりは私たちの文学概念を更新するようなものとして『千夜一夜』を捉え、詳細に現代文学理論の諸著作と『千夜一夜』を交叉させた研究は（本研究以外に）見当たらない。その意味で本論文は、これまで切り離されてきた文学理論研究と『千夜一夜』との邂逅を、真剣に模索しようとするものである。『千夜一夜』をめぐる具体的な論証や発見という面での功績は望むべくもないが、むしろこれまで蓄積されてきたさまざまな研究の成果を受け止め、それを活かしながら、「文学」について考察する契機としたい。

しがたってむろん本論文は、ある意味ではピノーやナッダッフそしてガズルの研究の延長上に、それを補完するものとして位置づけられるものであろう。アラビア語テキストの読解や分析、あるいはアラブ文学史にかかわる知識においては彼らに及ぶべくもないが、現代文学理論を形骸化した理解のままにただ『千夜一夜』に応用してみせる（あるいは時折引き合いに出してみせる）のではなく、現代の文学をめぐる理論的考察が問題にしているものを注意深くたどりながら、こうした理論的考察をさらに深め前進させるものとして『千夜一夜』のテキストを検討し、この作品の新たな価値を明らかにする点では、本論文はいくばくかの貢献をなしうるのではないかと考える。

第4節 本論文の構成

本論文はすでに述べたように大きく二部構成をとり、この序章ののち、第1章から第8章までの議論を展開する。末尾に結章として第I部・第II部を総合した観点から指摘をおこない結論とする。

第I部「ジャック・デリダにおける「範例性 *exemplarité*」の概念と「文学」ではデリダの議論をたどる作業を通じ、「範例性」概念の明確化と、この問題圏と「文学」との交接についての考究をおこなう。

³⁹ ガズルの最近の論文でも、ポストモダンの着想が基礎とされているが、文学におけるポストモダン思想そのものの検討がなく、表面的な指摘に終わっているきらいがある。Ghazoul, «Shaharazad postmoderne», in Aboubakr Chraïbi, dir., *Les Mille et Une Nuits en partage*, Actes Sud, 2004, pp.162-167.

⁴⁰ たとえば以下の論集を参照——When-chin Ouyang & Geert Jan van Gelder, *New Perspectives on Arabian Nights, Ideological Variations and Narrative Horizons*, Routledge, 2005; Chraïbi dir., *Les Mille et Une Nuits en partage*, Actes Sud, 2004; Yuriko Yamanaka and Tetsuo Nishio eds., *The Arabian Nights and Orientalism, Perspectives from East and West*, I.B.Tauris, 2006. 最後のものは、本論文第6章のもととなった拙論（Etsuko Aoyagi, “Repetitiveness in the *Arabian Nights*: Open Identity as Self-foundation”, pp.68-90）を含む。

第1章「「範例性」概念の展開」では、デリダの長年の思想活動を通じて、「範例性 exemplarité」という概念が彼の哲学における一つの重要な問題設定として形成され、それが文学の本質とかかわるものとして議論された上で、人間の生の原理そのものとして位置づけられるまでのアウトラインを描く。このために、初期の著作である『グラマトロジー』および『エクリチュールと差異』から「例 exemple」および「範例性 exemplarité」にまつわるデリダのこだわりを注視し、さらに、『弔鐘』および『絵画における真理』において例をめぐる思考に独特の展開が与えられることを指摘する。とりわけこの時点でデリダが「例」を、究極の特殊例とありきたりの一般例の二つの側面をもつものと考えていたことを明らかにする。さらにこの両極のあいだに置かれた人間の実存的な葛藤がカフカの短篇「法の前に」を扱った論考（「予断」^{プレジュジェ}）で前景化されていることをみる。ここですでに明らかにされた文学と「範例性」との結びつきをさらに、ジョイス論である『ユリシーズ・グラモフォン』にみながら、個別性と一般性との逆説的接合の場である文学が、個人を越えた膨大な記憶（のちの「アーカイブ」という発想につながる）の可能性と、個人を個人として支える魔術的な「自己例証機能」の力とを含んでいることをみる。さらにデリダの文学観の表明としてはおそらくもっとも凝集度の高いインタビュー「文学と呼ばれるこの奇妙な制度」を検討して、文学そのものを逆説の場とみなし、また文学を本来的に「範例性」を特質とするものとするものとするデリダの姿勢を明らかにする。さらに『パッション』において「範例性」という概念が一つの問題設定としてようやく明確に意識され、人間のさまざまなアポリアの根源の形象として、すなわち「決定不可能性の構造」そのものとして重要性を与えられていることを確認する。最後に『滞留』において、この「決定不可能性」を超えた一層高度な逆説の形象として「範例性」が人間の生の原理と人間にとっての文学（虚構）の本来性をともに明らかにするものとみなされていることを押さえる。第1章は、第I部全体の見取り図を提供するものと位置づけることができる。

第2章「「自己」の「範例性」」では、「自己」という素材をテーマにして、特個性の究極化が、最高度の一般性・普遍性へとつながるといふ、「範例性」のもつ逆説性の極限的な展開をみる。すなわち「範例性」とは単に特個性と一般性を並立させる可能性を示すのみならず、特個性が極限まで高められることと、究極の一般性、普遍性さらには「なにでもない」といふ非在の存在様態（言い換えれば「無」としてのあり方）とが同時に達成されることを示す概念であることをみる。まず、両義性を極端に高めたこうした存在のあり方を、デリダが、二人の詩人（フランシス・ポンジュおよびパウル・ツェラン）の自己表出の特異な様相を通じて、どのように考察したかを検証する。とりわけ「範例性」に立脚した自己（ないし人間存在）のありようとは、自己のうちに無をかかえるあり方である、という主張を示す。逆に、自己把握において「範例性」を自己特権化へとつなげてしまう欺瞞的論

理を、ヴァレリーを通じてデリダが厳しく退けていることを指摘する。その上でデリダ自身が自己を把握しまた自己を語るための方法を、他者とは交換不可能な特個的な自分を「なんだかわからないものの例」とみなす範例的意識に求めていることを確認する。「範例的」な主体とは、「反復可能性」に浸され、特権的な「一」者であると同時に「無」の存在でもあり、自己把握の不可能性つまりは「非＝知」を受け入れた存在であることを押さえる。

第3章「虚構文学の「範例性」」では、デリダにおける「範例性」の思考と「文学」をめぐる考察との交錯をたどる。デリダが文学を、「すべてを言う」ことが可能な場でありながら「言おうとする」ことができない（何かを言おうとしても何も言うことができない）場として捉えていることをまず指摘する。この逆説的な文学の場こそ、主体の自律性と他律性がともに鏡像的に無限反射を続け、しかもそこから強烈な自己が仮設的に立ち上がってくる場であることを、カフカの（文学的／非＝文学的という意味でも）両義的なテキスト「父への手紙」を採りあげて（「秘密の文学」において）デリダが論じていることをみる。また「文学」そのものが自律性と他律性の併有によって「系譜なき系譜」として成立しているとするデリダの議論を押さえる。また人間存在の「範例性」（特個性と一般性・普遍性の接合）をデリダがもっとも深く捉えた著作として「死を与える」に注目する。「範例性」を根幹に据えた人間のありようをデリダが「非＝知」に立脚した新たな主体性（非主体的な主体性）として提示していることを捉え、さらにこうした人間把握を可能にするのが本来的に虚構的な「文学」という装置であると主張されていることを確認する。最後に虚構文学が、たわごとでありながら、いや、たわごと（嘘、偽証）であるからこそ人間の自己把握の装置として機能することを、初期のアルトー論も若干参照しながら、とくに晩年のルソー再論である「タイプライターのリボン」を素材に考察する。まさに人間と文学とがともに有する、個であることと一般であること、いいかえれば特個的な出来事であることと反復的なマシンであることとの両立可能性を力説するこの著作は、本論文の観点からすると、「範例性」と「文学」とをめぐるデリダの思考の最前線を示すものと位置づけられる。

第I部のまとめとして、以上みてきたデリダの思考から抽出される、「範例性」という問題圏の重要な要素をなすいくつかの特質を再確認し、こうした考えに照応するものとして示されるデリダの文学観の諸特徴を指摘する。

第II部「現代的テキストとしての『千夜一夜』——文学における「範例性」のモデルとして」は、『千夜一夜』を、第I部で明らかにした「範例性」という逆説的なあり方を体現する著作として検討する。

第4章「『千夜一夜』の生成過程と本質的可変性」では、閉じた作品という通常の文学概念をはるかに逸脱するこの作品の歴史的生成過程の特殊性を検証する。『千夜一夜』はい

かなる意味でも「起源」という発想を退ける作品であり、つねに生成を続け、「完成」を何度でも繰り返してきたという特殊性をもっている。(9-10 世紀のアラブ世界においてもすでに) 一個の文学作品として社会的に認知されていながら、今日にいたるまで固定した一個の文学作品としての形を(決定的なものとしては) 与えたことがなく、人を無限に(再)「編纂作業」へと誘う。「作品」という概念を支えるアイデンティティのゆらぎを体現する(「作品」ならざる) この文学作品の逆説的で奇妙な特性を、その生成過程を概観しながら指摘する。

第5章『千夜一夜』の越境性——離接的テキストとして』では、『千夜一夜』という作品そのものの存在の揺らぎを、通時的な生成の観点からではなく、テキストに刻印された特性から確認する。『千夜一夜』のテキストは、物語集でありながらそれ自身の内部の物語どうしの境界を撤廃する離接的な構成をとる。さらにテキスト上にあえて異種混淆的な要素を集積し、あからさまに傾向を異にするさまざまな物語ジャンルを混在させ、時代とともに「文学」の枠を超えて多様な芸術ジャンルや生活文化へと接続し滲出していく象徴的なまでの越境性を実現している。『千夜一夜』は、共時的、テキスト論的、構造的、文化論的観点からみても、特個性と「他への開かれ」を同時に実現する、高度に「範例的」な作品であることを確認する。

第6章『千夜一夜』の汎=反復性——テキスト構成原理としての「範例性」』では、『千夜一夜』の範例的本質の顕現として、この作品に横溢する反復の現象に注目する。とりわけこの作品におけるさまざまなレベルでの顕著な反復の現象は、まさにデリダが着眼した「反復可能性 *itérabilité*」に適合していることに注目する。すなわち、差異を伴う反復、そしてなにごとかが存在したとたんに潜在的に措定される不可避的な反復、すなわち存在そのものを支える反復といった特質が、『千夜一夜』のさまざまな反復現象を貫いているさまをみる。『千夜一夜』のテキスト表現上の反復、内容面(人物、モチーフ等)での反復などを検証し、『千夜一夜』が本来的な反復可能性そのものを、この作品のテキスト生成原理としていることを指摘する。

第7章『千夜一夜』における物語行為——語る主体の範例化』では、物語ることそのものをテーマ化している『千夜一夜』のテキストにおいて実現されている特異な語りの構造や、この作品に観察される物語行為そのものの特異性について分析する。『千夜一夜』は、通常文学作品において(明示的にであれ暗黙裡にであれ)設定されている物語を支配する単一的起源としての語り手の像を、ときに消去し、ときに他の語り手と混淆し、さらに複数の語り手の声を多重的にかさね合わせ、ついに不可能な声の重層化を実現するいわば奇跡的なテキストである。物語るという行為が引き起こす物語る主体の特個化を一方で強調しながら、ほとんどシステムティックに、物語る主体を複数化し、類例化し、匿名化し、

重層化するこの作品は、「物語る」という行為そのものが、人間にとって自己が自己であって自己ではないという「範例性」の体験の契機であることを主張したい。

第8章『千夜一夜』における範例的主体像——「非＝知」と受動性」では、『千夜一夜』の登場人物像に的を絞る。『千夜一夜』の主人公たちは、それぞれ特個的な輝きを放ちながらも、実はきわめて奇妙なことに個性を消失し、特権を剥奪され、無知と無能力を刻印されて「誰でもよい誰か」として描かれている。こうしたまさに「範例的」な主体像を『千夜一夜』のさまざまな収録話を通して照射するとともに、こうした特異な主人公像が実は深い人間観にもとづくものであることを、イスラーム神学の議論を参照しながら論証する。この作業によって、「範例的」な人間観が、ひとを無力と絶望へと導くのではなく、むしろ（受動的な）能動性へと、自己の特権視を伴わない自己肯定へと向かわせるものであることを明らかにする。

結章においては、第Ⅰ部のデリダ論と第Ⅱ部の『千夜一夜』論をより緊密に連繋させるためにいくつかの確認をおこない、さらに「範例性」を通じて「文学」を考えることの意義についてまとめる。